

平成 28 年 10 月 31 日、政策秘書課職員との話です。

先日、民間で中間管理職として働く人と話す機会がありました。上の人の立場も、部下の気持ちも分かると悩んでいました。

そのとき、私が 30 年ほど前に介護施設を立ち上げた際、同級生から贈られた言葉、「徂徠訓（そらいくん）」を紹介しました。

「徂徠訓」は、江戸時代、8 代将軍徳川吉宗に仕えた儒学者、荻生徂徠（おぎゅう そらい）が記したもので、人の上に立つ者の心得が書かれています。

「徂徠訓」

- 一 人の長所を初めより知らんと求むべからず。人を用いて初めて長所の現はるものなり。
- 二 人はその長所のみを取らば即ち可なり。短所を知るを要せず。
- 三 己が好みに合う者のみを用ふるなかれ。
- 四 小過を咎める用なし。ただ事を大切になさば可なり。
- 五 用ふる上は、その事を十分に委（ゆだ）ぬべし。
- 六 上にある者、下の者と才智を争うべからず。
- 七 人材は必ず一癖あるものなり。器材なるが故なり。癖を捨つべからず。
- 八 かくして、上手に人を用ふれば事に適し、時に応ずる人物、必ずこれにあり。
- 九 小事を気にせず、流れる雲のごとし。

人の長所を見つける。自分と合う人のみを登用しない。人には必ず一癖あるもので、それがその人の個性である。等々が書かれています。

きちんと仕事をしたい上司は、どうしても部下の出来ない点ばかりに目が行きがちです。それは、職場だけでなく、家庭でも同じことが言えるかもしれません。人の上に立つ者は、大らかな気持ちで、相手の長所に目を向けることが大切ではないでしょうか。私は、このことを忘れないために、「徂徠訓」をコピーしたものをずっと手帳に貼っています。

冒頭の中間管理職として働く人には、辛いことも多いだろうが、今、悩み、苦勞していることは、将来の自分にとって、必ず身になり、自分の深みにつながるからと伝えました。

「もっと大らかに暮らしたら」

大人も子どもも、生きていくことが楽になると思います。

～市長の話を聞いて～

私は「徂徠訓」を初めて目にしました。心に留まる言葉がありました。

市役所では、2年ほど前から「ほめる達人研修」を行っています。その研修の中で、褒め言葉をできるだけ多く書くという課題があります。多い人は30を超える褒め言葉を書き出しますが、私は10個がやっとでした。

しかし、日常生活の中で、褒め言葉を意識するようになると、相手の長所が探しやすくなり、会話も弾むようになったと感じています。心の持ちようで、人は少しずつ変われると思います。